

父を超える農業経営者に ～プロジェクト学習から生まれた私の夢～

意見発表会 分野Ⅰ類 北海道ブロック連盟 北海道岩見沢農業高等学校
農業科学科 2年 大塚 悠生

私の夢。それは、大塚ファームを継ぎ、今以上に高品質なミニトマトを生産する、そして父を超える経営者になること……。岩見沢農業高校での学び、実家での実践など、実現に向け充実した毎日を送っています。

有限会社「大塚ファーム」は北海道の中心都市、札幌から北東に約30kmの新篠津村にあります。ミニトマトとサツマイモを主に生産している農業法人で、父の代から有機農産物の栽培、道内初の取り組みである干しいも製造をはじめとした農産加工、大手スーパーとの契約栽培、インターネット通販など多角的な経営を行い、5年前にはこれらの業績が評価され「日本農業賞」を受賞。表彰式での父の姿が子供ながらにとっても誇らしかったのを覚えています。

会社のロゴマークは私達兄弟がデザインされており、大きな期待も感じます。この父の想いや、「父さんのようになりたい!」という漠然とした憧れから、後継に向けた学習をしたいと岩見沢農業高校への進学を決めました。

高校入学後、専門的な農業学習、スーパーサイエンスハイスクールに関わる最先端の農業実践、地域をけん引する農業者との出会い。これらを通して将来の経営に対する強い気持ちと自信につながったと同時に、父への「憧れ」が「超えるべき目標」へと変わりました。そして父も意欲的に農業を学ぶ私を見て、我が家の経営や改善すべき課題について話してくれることが徐々に多くなりました。

ある日父が「どうすれば良いミニトマトを、安定して長期間出荷できるだろう……」と頭を悩ませていました。

大塚ファームでは、ミニトマトをハウス48棟で栽培し、毎日の収穫量は約1トン。収入に占める割合が最も高い作目です。契約栽培のため毎回提示された量の出荷を行わなくてはならず、収穫量が落ちる時期には、出荷を断ることもありました。特に10月以降は収量も減少。着色不良など品質も低下しています。経営をより安定させるために改善すべき大きな課題です。

そんな時、AGRI 探求の授業でトマトの摘心実習があり、その中で先生から「低段で摘心し、品質を向上させるトマトの低段取り栽培技術がある。」と聞きました。興味を持ち詳しく調べて見ると、この技術は1株あたり第3果房程度まで収穫を行い、この作型を年2～3サイクル行うことで、品質向上、収量増加が期待出来るというものでした。特に低温が厳しい北海道においては有効な技術で、高品質なトマトを長期間提供することが可能と

なります。これは秋期の品質低下という我が家のミニトマトの課題解決に応用できる！と考え、2年生となる今年度、野菜班の研究テーマにしました。

北海道でも行っている2本仕立ての低段取り栽培を選定し、第3花房までの収穫を3作繰り返し、慣行区と比較することとしました。3月に播種し、4月に苗の摘心作業を実施。

「こんなに短く切断して大丈夫かな・・・」と不安になりながら、おそろおそろ子葉の上にはさみを入れました。数日後には子葉と主茎の間から小さな芽が出ており、安堵の気持ちと、農業の面白さを実感しました。2本仕立てにした苗を5月に定植し調査を開始。現在までに低段区の定植を2回、そして生育調査、収量調査を継続しています。播種や定植にかかる労力面の課題等ありますが、品質は慣行区に比べ低段区が優れており、収量も増加傾向にあるとわかりました。研究に協力いただいている酪農学園大学園田教授から「地域農業者の収益確保につながる研究。将来の経営に向けても頑張ってもらいたい。」との言葉をいただきました。

この研究をミニトマトで応用したいと父に相談。「どうなるのか興味がある。やってみろ！」と了承してもらい、実家のビニールハウスにも試験区を設置。学校のプロジェクト学習、実家での調査を連動させ、学んだことを将来の経営に役立てられるよう頑張ります。

これからの経営者に大切なこと。私は「経験」に基づく「選択肢」だと考えます。多くの経験・学びから、様々な農業の手法、経営のテクニックを学習し、社会情勢を見通し、先見性を持ちながら状況に合わせたベストな選択をする。父の姿、そして高校での学習を通してこの重要性を実感しました。だからこそ多くの経験値が得られる今のプロジェクト学習が夢の実現に向けて学ぶべきことがたくさん詰まった充実した活動になっています。

高校卒業後はこれまでの学習をもとに、農業関係の学校に進学し、経営やマーケティングで必要な知識技術を学びます。高校、そして進学後の学びを活かし、将来は私が生産する高品質なミニトマトで今以上の収益を目指します。そしていつしか「大塚ファーム」の経営者として、「父を超える！」。